



## 優秀賞

### 握り拳ひとつ分の命

陸前高田市立第一中学校 3年  
若杉 紗香 (わかすぎ さやか)

一握りの拳。この小さな拳の、命の重みを、私たちはどれほど理解しているのでしょうか。

もしも、父がいなくなるとわかっていたら……。大切な思いを伝えたのに。引き留めることができたのに。できることなら戻りたい……。

私の父は、市役所に勤めていました。あの日、父は地震の後、第一避難所で避難誘導をしていたと聞きました。来る日も来る日も父の帰りを待ち続けた避難所生活。しかし、父が帰ることはありませんでした。

最初は父の死を受け止めることができず、涙も出ませんでした。いつもそばにいた家族に、もう二度と会えないことが信じられませんでした。

家族が死ぬということを想像できますか。それは耐えがたいほど辛く悲しいものです。

それと同時に、なぜ、父が死ななければならぬのかという思いがわいてきました。市役所の職員として、消防団としての使命もありますが、自分の命を真っ先に考えて、すぐ避難してくれれば助かったのに……。父の死を何かにぶつけようと思いました。

そんなある夜、泣き崩れる母を祖母が慰めていました。祖母が去った後、母が言いました。「一番悲しいのはばあちゃんなんだ。自分の息子が親よりも先に死んでしまうんだから。」かけがえのない家族を失うということ、そして、残された家族の深い悲しみ。私は忘れることはないでしょう。

東日本大震災では、多くの尊い命が失われました。家族を亡くした人は、私たちの一中にもたく

さんいます。人の命がどれだけ儂いものなのかを私たちは身をもって知りました。

しかし、今、ニュースでは犯罪や自殺という文字が絶えず流れています。いじめ苦に、死を選んだり、人を殺してみたかったという理由で殺人を犯したりする人が後を絶ちません。命とはそんなに簡単に捨てていいものなのでしょうか。なくしていい命なんてこの世にはないはずです。

残された家族や友人の思いは——。自分が気づいていれば。もっと話をしていれば、なぜにも教えてくれなかったのか……。自分を責め、周りを恨むのだと思います。「もっと話しておきたかった。」「もっとそばにいたかった。」5年経とうとする今も、私が忘れることがなかったように、生涯思い続けるはずです。

もっと生きていたかったと思いながら死んでいった人たちがたくさんいるのに、自ら死を選んだり、人の命を奪ったりすることがどんなに残酷か。

この握り拳ひとつ分しかない大切な命を、散らしていく世の中であってはいけないのです。この小さな命の大きな重みを受け止めて、精一杯生きることが私たちの生きる意味なのではないでしょうか。

身近な人がいなくなってから気づく、命の尊さ——。みなさんも考えてください。命の儂さ、そして、命の重みを。

#### ○ この主張をどんな人に届けたいですか？

震災を経験したわたしたちだからこそ、伝えられる命の重みを、聞いている方々、いじめを受けたり、命を軽く考えている人、そして、亡くなった父に伝えたい。握り拳ひとつ分しかない、大切で儂い命を簡単に捨てることなく、精一杯生きてほしいという思いを伝えたい。震災で亡くなった人たちの思いを受け止めて、今を一生懸命に生きて、胸を張れるような生き方を世界中の人々にしてほしいと思う。